



俳諧
草紙
八のん
拾の聲
和
松垣
和
夫
画



ハヤシ種改題に就て

ハヤシ種の出題法家の所著 願を以て更に
 才干を發せしむる事となりし。未だ如何の
 故にや此種 妙に題名を更てりしとては格が
 わるゝ。夫れ今の名が悪くも亦危に及ら
 ぬを以て。又既に古き一「よ」を以て
 今ですらも 福時勢の推移に適合するも
 せぬしを以て改題す。只何の謂もなく改題し
 てりしとては 或も一解一流の
 奔放癖の或は何苦かの 暗示かも知れず
 後の世にさういふのから強いて送らばすに
 仕ふよきに ぼかされていふ 改題と云ふ事に法家
 いたまへ。併し「ク」腹の 此の必要を以て
 だけども 此らに一任せしむる ぬを以てせん。アレ
 こゝと種々 雑筆を註した。飯の巾の 小の様に
 かり、と 歯を浮かせ 様を名を 甚う平です。夫
 張ハヤシ種と云ふ 種は古雅な味のある。尚
 潔にして 或る意味を 語ると云ふ名が 然し
 ず。そゝを 可から 飯と云ふ名を得ました。こゝ
 危版と云ふものは 苦心の中を 又は急変に出
 事事を 觸れたいのです。その 少年 少年 少年
 かの 若ですが。丁度 只今の 解の 格ふら

夏(贈代送費共) 拾句一組 金貳拾錢
 餘二句毎に壹錢増

夏は 月 日 吾話人一同
 代表選 青山室舟選
 五味 松塘選 三才五客一 呈賞
 日版は七月二十八日訂正し 以下 場所は深川
 不動堂名橋内、阿比古家奥室等にて 歌は雨乞
 睡草、各而吟 賞事は互選二字より八号まで
 とらむる物を呈す 鳥目は貳百文と外に自
 景代として六百文(現十)にて反載 互選 投票者
 は季節物「團扇」板まじを投じて 出席の方を
 會選 五味 松塘選 三才五客一
 作家 西川 知原選 呈賞
 代表選 青山室舟選

ハヤシ種改題に就て

ハヤシ種の出題法家の所著 願を以て更に
 才干を發せしむる事となりし。未だ如何の
 故にや此種 妙に題名を更てりしとては格が
 わるゝ。夫れ今の名が悪くも亦危に及ら
 ぬを以て。又既に古き一「よ」を以て
 今ですらも 福時勢の推移に適合するも
 せぬしを以て改題す。只何の謂もなく改題し
 てりしとては 或も一解一流の
 奔放癖の或は何苦かの 暗示かも知れず
 後の世にさういふのから強いて送らばすに
 仕ふよきに ぼかされていふ 改題と云ふ事に法家
 いたまへ。併し「ク」腹の 此の必要を以て
 だけども 此らに一任せしむる ぬを以てせん。アレ
 こゝと種々 雑筆を註した。飯の巾の 小の様に
 かり、と 歯を浮かせ 様を名を 甚う平です。夫
 張ハヤシ種と云ふ 種は古雅な味のある。尚
 潔にして 或る意味を 語ると云ふ名が 然し
 ず。そゝを 可から 飯と云ふ名を得ました。こゝ
 危版と云ふものは 苦心の中を 又は急変に出
 事事を 觸れたいのです。その 少年 少年 少年
 かの 若ですが。丁度 只今の 解の 格ふら

ハヤシ種改題に就て

ハヤシ種の出題法家の所著 願を以て更に
 才干を發せしむる事となりし。未だ如何の
 故にや此種 妙に題名を更てりしとては格が
 わるゝ。夫れ今の名が悪くも亦危に及ら
 ぬを以て。又既に古き一「よ」を以て
 今ですらも 福時勢の推移に適合するも
 せぬしを以て改題す。只何の謂もなく改題し
 てりしとては 或も一解一流の
 奔放癖の或は何苦かの 暗示かも知れず
 後の世にさういふのから強いて送らばすに
 仕ふよきに ぼかされていふ 改題と云ふ事に法家
 いたまへ。併し「ク」腹の 此の必要を以て
 だけども 此らに一任せしむる ぬを以てせん。アレ
 こゝと種々 雑筆を註した。飯の巾の 小の様に
 かり、と 歯を浮かせ 様を名を 甚う平です。夫
 張ハヤシ種と云ふ 種は古雅な味のある。尚
 潔にして 或る意味を 語ると云ふ名が 然し
 ず。そゝを 可から 飯と云ふ名を得ました。こゝ
 危版と云ふものは 苦心の中を 又は急変に出
 事事を 觸れたいのです。その 少年 少年 少年
 かの 若ですが。丁度 只今の 解の 格ふら

ハヤシ種改題に就て

ハヤシ種の出題法家の所著 願を以て更に
 才干を發せしむる事となりし。未だ如何の
 故にや此種 妙に題名を更てりしとては格が
 わるゝ。夫れ今の名が悪くも亦危に及ら
 ぬを以て。又既に古き一「よ」を以て
 今ですらも 福時勢の推移に適合するも
 せぬしを以て改題す。只何の謂もなく改題し
 てりしとては 或も一解一流の
 奔放癖の或は何苦かの 暗示かも知れず
 後の世にさういふのから強いて送らばすに
 仕ふよきに ぼかされていふ 改題と云ふ事に法家
 いたまへ。併し「ク」腹の 此の必要を以て
 だけども 此らに一任せしむる ぬを以てせん。アレ
 こゝと種々 雑筆を註した。飯の巾の 小の様に
 かり、と 歯を浮かせ 様を名を 甚う平です。夫
 張ハヤシ種と云ふ 種は古雅な味のある。尚
 潔にして 或る意味を 語ると云ふ名が 然し
 ず。そゝを 可から 飯と云ふ名を得ました。こゝ
 危版と云ふものは 苦心の中を 又は急変に出
 事事を 觸れたいのです。その 少年 少年 少年
 かの 若ですが。丁度 只今の 解の 格ふら

ハヤシ種改題に就て

ハヤシ種の出題法家の所著 願を以て更に
 才干を發せしむる事となりし。未だ如何の
 故にや此種 妙に題名を更てりしとては格が
 わるゝ。夫れ今の名が悪くも亦危に及ら
 ぬを以て。又既に古き一「よ」を以て
 今ですらも 福時勢の推移に適合するも
 せぬしを以て改題す。只何の謂もなく改題し
 てりしとては 或も一解一流の
 奔放癖の或は何苦かの 暗示かも知れず
 後の世にさういふのから強いて送らばすに
 仕ふよきに ぼかされていふ 改題と云ふ事に法家
 いたまへ。併し「ク」腹の 此の必要を以て
 だけども 此らに一任せしむる ぬを以てせん。アレ
 こゝと種々 雑筆を註した。飯の巾の 小の様に
 かり、と 歯を浮かせ 様を名を 甚う平です。夫
 張ハヤシ種と云ふ 種は古雅な味のある。尚
 潔にして 或る意味を 語ると云ふ名が 然し
 ず。そゝを 可から 飯と云ふ名を得ました。こゝ
 危版と云ふものは 苦心の中を 又は急変に出
 事事を 觸れたいのです。その 少年 少年 少年
 かの 若ですが。丁度 只今の 解の 格ふら

以上一切七月二十一日

大正四年七月二十日 發行
 東本市深川公園地十二号
 選者 五味 時 雄
 印刷人 中田 治三郎
 發行所 萬友會俳句部

本法代物 飛脚債 貳百文

▲吟規 用紙ハ半紙前面作品のみ後面(住所氏名雅野明記の事)正味餘株及び録興欄各種は総て別紙に認む事 録興欄のみの出吟者は入花外に誌代送費として必き金拾五錢添付の事、然し必ず本誌を送らす ▲入花は為替の事。

●會員は普通と特別の二種を置く ●普通會員は毎月金壹圓を維持費として 前納する事 ●二種の會員ハ本誌を送附す ●普通會員は金拾五錢余は一句一錢増余興欄を規定通す。特別會員は総て入花とす ●特別會員を隨時入退更す事。

●會費は普通と特別の二種を置く ●普通會員は毎月金壹圓を維持費として 前納する事 ●二種の會員ハ本誌を送附す ●普通會員は金拾五錢余は一句一錢増余興欄を規定通す。特別會員は総て入花とす ●特別會員を隨時入退更す事。

大正四年七月二十日 發行

東本市深川公園地十二号
 選者 五味 時 雄
 印刷人 中田 治三郎
 發行所 萬友會俳句部

本法代物 飛脚債 貳百文

